

(大島郡笠利町大字宇宿166番)

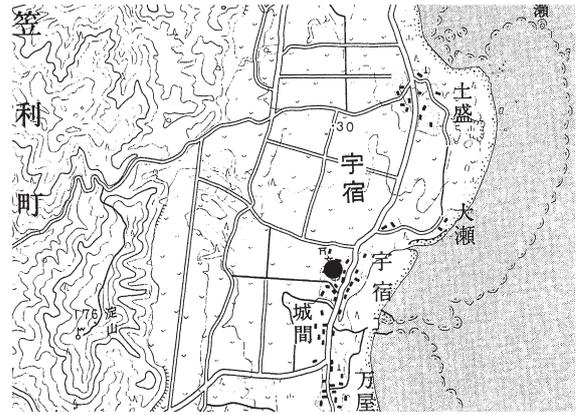
### 位置と環境

宇宿貝塚の台地と宇宿小学校構内遺跡の台地は標高約13mでほぼ同じ高さである。遺跡の西北にある台地は現在墓地になっている。涯下は洞窟が4つあり、トフル墓として使用されていた。現在は廃棄され、人骨などは移されているが中には取りこぼしの人骨片が散乱しているのが確認できる。斜面北端部の標高5mの地点に1基、斜面中央部分標高7mの地点に2基が並んでいる。4基めは2・3基の南側に位置し、入口部分が塞がれている。トフル墓の前面はテラス状になっており、人が容易に入ることができる。1号がもっとも大きく、開口幅は3～4mである。2号は開口幅2.5m、奥行きは3～3.5m、3号は開口幅1.7m、奥行き1.5mである。トフル墓としては小規模のトフル墓である。なお、「トフル」とは「天国に通る道」といいう意味である。

この台地全体は集落の聖域的な要素もあり、台地中央には神社もあったが現在は西側に移されている。台地東側の民家の敷地内からも貝殻などが散乱しており、この台地全体が遺跡の可能性が高い。

### 調査の経緯

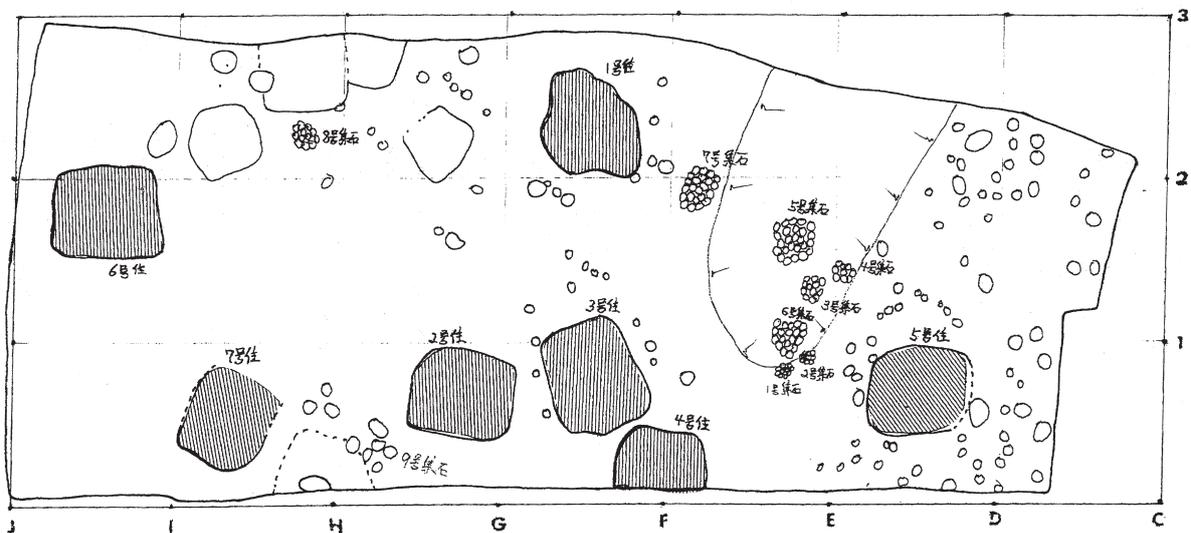
遺跡は、昭和30年の小学校建設工事にもなって多量の遺物が出土したことから発見される。当時は



第1図 宇宿小学校構内遺跡の位置

日本復帰まもなく、学校建築を優先して子供たちの教育環境づくりが優先されていた。また、土器が出土したとしてもさほど問題意識もなく、「カムイ割れ」としてかたづけられていたのが現状である。ちょうどその時期に同集落内で現在の宇宿貝塚の発掘調査が九学会連合によって行われていた。そのときに試掘調査を行い多量の土器などの遺物を出土している。ただし、これらの報告は試掘を行い遺物を確認したとの程度であり、本報告はない。出土遺物は小学校の郷土資料館にしばらく保管されていたがその数は年々減少しており、散出している。

学校敷地全体が聖地であり、神社があったことから、お払いをして神社移転後整地作業が行われている。なお、戦時中は小学校が爆撃を受け校舎も校庭も大きな被害を受けたという。このように何度とな



第2図 住居跡遺構配置図

く宇宿の聖地は被害を受け地形を少しずつ変えていった。昭和30年に校舎建築が行われたことによって破壊もされたが逆に小学校ということで敷地内が保護されたことにもなる。復帰後の復興と奄美群島に特別処置法がおかれ、大規模な開発がなされた。その後のリゾートブームでも景勝地や遺跡などが破壊されていった。

今回の発掘調査は校舎の老齢化にともないコンクリート魂などが落ちてきたことから、新增改築事業が地区PTAなどから要望がついていた。それに伴い平成11年に遺跡の確認調査が行われた。その結果かなりの遺物の出土があった。攪乱部分も多いがプライマリーな部分も残っていることもわかった。町教育委員会は県教育委員会とも再三にわたって遺跡の保護について協議がなされた。敷地内に残る遺跡をどの程度残せるか、工事に伴う遺跡の調査の時期などについて最後まで話し合いが行われた。その結果、遺跡の成果を校舎建築の中に取り入れ、遺跡の所在する学校として遺跡も郷土教育の一環として取り入れることにする。発掘調査は平成12年3月6日～5月21日までとして調査を行った。

#### 遺構と遺物

第1文化層は遺跡全体に広がっていたと思われるが、その大半は攪乱されており、かろうじて西側住居跡部分が残っていた。

第1文化層はCラインからIラインまでの間に残っているが、層全体的にJからAラインに傾斜している。第1文化層を形成していた時期も同様な地形であるが、E、F、Gラインは1から3に深くなり、谷状の地形になっている。AラインからCラインまでは白砂層になっており、遺跡の形成は確認できなかった。ただし、整地作業の段階で第1文化層のほとんどが削除されていた。その攪乱層からの出土資料はほとんど第1文化層から出土する資料と同類が多い。

第1文化層の残りは文化層の底辺部分か、掘込まれた遺構部分だけである。上部はそのほとんどが攪乱を受けていた。谷になっているFラインは第1文化層が1.2mの砂丘魂となってそのまま谷底にずれ落ちている。中からは土器がまとまって出土し、石

組遺構そのものもずれ落ちていた。このような破壊の状況からみると第3回目の破壊で、昭和30年に行われたブルドウザーの配土板で押し整地された状況であることがわかる。破壊のされかたも低い地へ押しした状況なため、中から出土する土器などは完形品に近いものや完形品の石皿、大型な土器片などが多い。

住居跡は全部で7軒確認されているがH-3のプランは住居跡の可能性が高いといえよう。ただし、ここでははっきりした遺物や石組み、ピットなどが不明だったため住居跡としてはとらえなかった。

地形的にみると谷間西側のFラインからIラインにかけて住居跡が集中している。5号住居跡はD-1区の東側に位置している。

今回の宇宿小学校構内遺跡出土の住居跡は約2m×3mとややこぢんまりした感じである。1号、5号は石組みはなかったが、攪乱部分や周辺から石のまとまりがあったことや、住居跡プランの外側は石が抜かれたような攪乱であることなどから石積み住居跡と思われる。石積み住居跡はウフタ遺跡で発見された例から約1m位の高さに石を周囲に積み上げた「石囲い住居」と考えられる。

これらの住居跡は住居跡内に炉跡を持っていることが共通する。2号住居跡と6号住居跡は特に残りがよく、石組み・炉跡もしっかりしていた。また、二つの住居跡とも入り口部分はビーチロックが一段低く埋め込まれているため、はっきりしている。また、この時期の住居跡は石囲い住居跡が主であったと思われる。サモト遺跡や宇宿貝塚も住居跡内にその周辺から石組みに使用された石と同様な石が多く出土していることから察せられよう。

住居跡内からの出土遺物は以外と少ない。周辺的生活層(文化層)や攪乱層から多量の土器が発見されているのと比較すると少ないといえよう。ただし、石組みの一部分と床面を残すだけの住居跡もあることから一概に少ないとは断定できないかもしれない。

第1文化層は全体的に上層部分はほとんど削平され、整地された際に破壊されている。削平部分的には第2文化層から第3文化層上層まで及んでいるところもある。2回にわたって整地され、戦時中爆弾を

受けたことなどを考えると、これだけ残っていたことが不思議なぐらいである。縄文時代晩期の住居跡として貴重な発見であることは言うまでもない。

第2文化層も出土遺物から考察して第1文化層に近い時期であると思われる。重弧文に刺突を有し、縄目痕のある土器が出土している。縄文式土器そのものである。集石遺構も多い。

第3文化層は貝だまりと焼砂遺構が目立った。貝だまりはアサリ貝のような二枚貝が多かった。焼砂は砂地に直接火を燃やしているため、砂が赤褐色に焼け、炭化物も多い。石組みや掘込みなどの住居跡遺構などは確認されなかった。

土器は条痕文や貼り付け凸帯文を有するやや厚手の土器が多く出土している。石器はチャートの剥片が目立っている。貝製品も出土しており、遺物は豊富である。遺物の出土状況は全体的にG-1, H-1区の西側に集中している。東側に行くに従って薄くなっている。

第4文化層は第3文化層に時期的には近いと思われる。主な出土品は条痕文土器、貝輪、ヤコウガイ製品、貝ヒ、骨製品、埋葬犬、埋納石斧、チャート石核などが出土した。このいずれの資料もあまり、類例を見ない貴重な資料ばかりである。

#### 特徴

宇宿小学校構内遺跡は宇宿貝塚に見られない資料が多く出土した。貝塚とは立地も似ており、近くでもあるため貝塚と同様な資料の検出を予想したが大きくはずれてしまった。攪乱層の中からはほとんど完形に近い土器の出土もあり、びっくりさせられた。これは前述したように遺物包含層をそのままブルトナーで押しして窪地を整地したと言う古老の証言と一致する。攪乱層のほとんどは第1文化層と第2文化層の遺物が多い。第1, 2文化層ともかなりバラエティーに富んだ資料が多かった。中でも注目された土器はLR縄文を施しており、縄文式土器そのものであった。「津雲上層式土器」と思われる。津雲式は中国地方における縄文時代後期の土器とされ、器形や文様は口縁部の外側を厚くさせ文様帯とし、波頭部に同心円文や渦文を配する。波頭の間は平行の沈線や弧状文をめぐらせている。その分布も中国、

四国地方で近畿地方の「北白川上層式土器」や九州の「北久根山式土器」にその影響が見られると言う。今回出土した土器は中国、四国地方の土器がダイレクトに入ってきた土器と考えて良いだろう。今後この系統については奄美考古の新たな課題となった。

第3文化層の土器、貝製品についても珍しい資料であるがチャートのチップ等も多く貝と石器についても追加報告の必要があるには当然である。シャコ貝製と思われる貝製品で「鮫刃状」に加工されているものやボタン状をなし、4つの孔を有している貝製品も出土した。第4文化層出土の埋納石斧は6本もの石斧が埋納されており、このような出土例も珍しいものである。埋葬犬については2頭が埋葬されており、縄文時代前期の資料としては全国でも珍しい資料である。掘込みを有して丁寧に埋葬されていた。貝製品や骨製品についても同様である。

骨製品はヘラ状で上部に1対の孔を有し縦に5本の刻目を入れている。部分的に斜状の刻目も入っている。用途不明の珍しい骨製品である。そのほかに表採資料でもたくさんの骨製品が得られている。特に、両端のとがった棒状の「ツリバリ」が多かった。

石製品も同様に多量の出土であるが石垂状をなし、平たん石面に目と口らしきものが描かれている可能性があり、この製品も時間をかけて分析の必要性があると専門家から指摘された。そのほか石皿も12点が攪乱層の中から表採されている。いずれも一級資料である。石皿底部に2対の脚状をなすもの、弧状のX字状をなすもの両端に帯状を有するものなど底部が彫刻されている。これらの膨大な資料は今後時間をかけて調査をする必要がある。そうすることによって南島の縄文時代研究解明に大きく前進する資料ばかりである。

#### 資料の所在

出土遺物は、笠利町歴史民族資料館に保管されている。

#### 参考文献

笠利町教育委員会2003「宇宿小学校構内遺跡」『奄美考古』5号

(中山清美)



写真1 第2文化層検出 石組住居跡



写真2 第2文化層出土 土器



写真3 第3文化層検出 集石

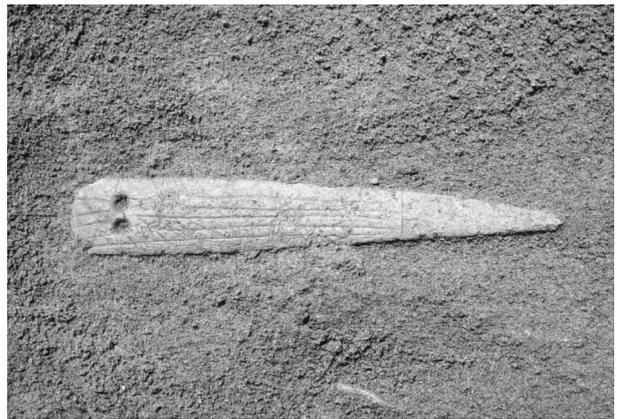


写真4 第4文化層出土骨製品

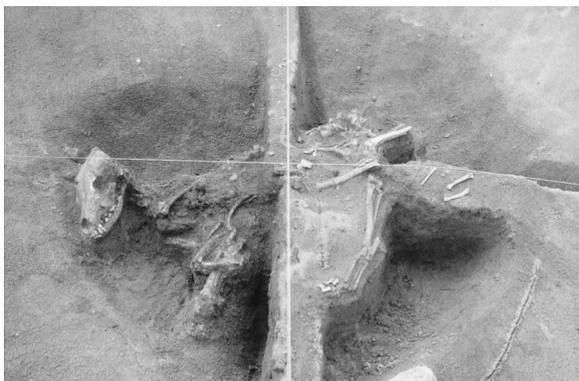


写真5 第4文化層検出 埋葬犬



写真6 表採 骨製品